

高校からの経験生かし 国際協力の現場へ

青年海外協力隊研修生

池田 愉歌さん



バングラデシュ派遣に向けて研修に取り組む

大槻先生がWITHを立ち上げる際のメンバーの一人だった池田さん。当時からボランティア活動に興味があり、大槻先生を誘って路上生活者の夜回りボランティアに参加したこともあるという。2年生のときに大槻先生のゼミに参加して教材の作成からワークショップの運営までの一連の工程を経験。JICA関西のイベントや、協力隊経験者が集まる場所でのワークショップを通して、国際協力や開発教育などについて深く学んだ。

また、テレビで放送された国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員の活動に衝撃を受け、よりいっそう国際協力への道に魅力を感じるようになった。大学ではNPOのスタディーツアーや卒業論文のための現地調査を経験し、途上国で仕事をするために青年海外協力隊への参加を決めたという。大学で学んだ現地調査の知識を生かして、バングラデシュの地下水の汚染が深刻な地域で、「安全な水」に関するワークショップや啓発活動に取り組む予定だ。

「私にとって、国際協力とは、課題を抱える地域の人々が、それぞれの可能性を伸ばす活動です。現地の人たちと共に活動することで、自分自身も学び、成長できると考えています」という池田さん。2年間という限られた任期の中で住民の「安全な水へのアクセス」を少しでも可能にするために、今から思いをめぐらせている。

可能な地球のためのゼミ」として開発問題を学ぶゼミを担当した。同クラブの生徒が中心となってゼミナーや講演会に参加し、独自の「国際理解ゲーム」を作成して出張授業を行うなど、楽しみながら開発問題を学んだ。

高校での活動を通して、大学で学びたいことを見つけた生徒や、NPO活動に参加している生徒なども多い。世界を知ると同時に、社会での道しるべを見つける役にも立っているようだ。

「これは、と考えた大槻先生は、協力隊OBの仲間たちと一緒に「国際理解研究会みなみの風」を立ち上げ、以来、ずっと研究を続けている。ゲーム感覚の教材や授業案を考案し、学校の授業や自治体のゼミナーでの講師なども行っているという。

「衣服や日用品、食料など、私たちの生活はいや応なしに世界とつながっています。私たちは世界を取り巻く諸問題と無関係ではないどころか、そうした問題は意外と身近なところで起こっているんです」と強調する大槻先生。これまでに歴任してきたどの学校の生徒も、開発教育には興味を示してくれたと強調する。勇気を持って世界に一步を踏み出せば、何かが変わる――。自らの経験で感じたそのことを、生徒や他の先生たちと一緒に伝えていくつもりだ。



環境教育に興味を持つ若者は多い。自分たちの生活とのつながりは、国際理解への糸口だ



合同学習会で、生徒自身が調べた内容を発表。こうした経験が、生徒たちの将来にもつながっている

大槻先生は、自分の協力隊参加を振り返って「実のところ、参加するときはそこまで大きな目的を持ってはいなかったんです」と言う。理科教師の大槻先生はネパールに派遣され、1年目は山間の小中高一貫校で理科教育を受け持ち、2年目は政府機関で理科のカリキュラムや教科書の作成を担当した。「日本の子どもは勉強と言うとノートに書き始めますが、ネパールの子どもは教科書を読み始めます。そういうところがそれぞれの得意分野につながっていくのだからと感じました」

帰国後、自分の経験を日本社会に還元する方法を考えているうちに、開発をめぐるさまざまな課題を考える。開発教育に出会った。

「これだ、と考えた大槻先生は、協力隊OBの仲間たちと一緒に「国際理解研究会みなみの風」を立ち上げ、以来、ずっと研究を続けている。ゲーム感覚の教材や授業案を考案し、学校の授業や自治体のゼミナーでの講師なども行っているという。

大槻先生は8年前、堀川高校に異動してすぐのころ、授業の中でレアメタルを取り上げる機会があった。その時、「レアメタルをめぐって、アフリカで内戦が起きてい

る」と話したことをきっかけに、もっとこうした話が知りたいという生徒たちが集まってきた。そこで、後のユネスコクラブとなる「ワイルドスタディWITH」というクラブを立ち上げた。

また、担当教師が得意分野のゼミを開く「総合探究」では、「持続

大槻一彦 OTSUKI Kazuhiko
青年海外協力隊としてネパールの学校に派遣され、国際理解と開発教育の大切さに気付く。日本に帰ってから協力隊OBと研究会を立ち上げ、開発教育に取り組んでいる。

世界との出会いを 日本に還元するために

京都市立堀川高等学校
大槻 一彦先生



開発教育全国研究集会で。世界を日本の若者に伝えるため、開発教育は大槻先生(中央)のライフワークになった

日本社会で世界を教えたい

世界を見てきた経験を、どうやって日本に伝え、生かしていくか。授業では知ることのできない風景を生徒たちに届けるため、大槻一彦先生は、課外活動や研究活動に取り組んでいる。

